

孫見つけてくれた船だから

183/9

つなぐ
東日本大震災7年

3

廃業する連絡船保存活動

気仙沼市の大島に係留されている小型連絡船の「ひまわり」114日、宮城県気仙沼市、福岡県大島市

大崎喜久夫さんの孫、緑ちゃん
大崎さん提供



緑ちゃんが見つかった当時のことを語り合う大崎喜久夫さん(左)と「ひまわり」の菅原進船長＝気仙沼市の大島



どの3人暮らし。あの日、大きな揺れの後、保育所へ車で迎えに行き、3人で戻った。港に近い自宅近くで大崎さんは様子を見ようと車を降りた。その時、背後から津波が迫ってきた。大崎さんは小高いところへ駆け上がったが、2人が乗っ

た車は流された。津波が収まった頃を見計らって、流された車に向かうと、ずぶぬれの妻だけがあった。緑ちゃんは見つからなかった。港周辺は見渡す限り、がれきで埋まった。大崎さんはその中を捜し続けた。古くからの知人で、その姿を見ていた菅原船長は何度も声をかけた。「必ず見つけてやっからな」と。

その春、小学校入学のはずだった。ランドセルを背負い、喜んでいった。「物覚えのいい子。暗算で2桁に繰り上がる足し算ができた」。緑ちゃんが旅立った翌日、学習机が届く予定だった。「あの時、保育所に迎えに行かなかったら……」。大崎さんは今でも後悔の念にとらわれる。

し、役員を務めている。自宅の仏壇には少しだけほほ笑む緑ちゃんの写真が飾られている。七五三の時にドレス姿で撮影してもらった。「供養のために生きているようなものだ」。大崎さんは朝夕、手を合わせ「墓参りも欠かさない」。(募金を呼びかける)「ラシをもって、たくさんの人に声をかけたい。そのくらいのことしかできないけど……」。かけがえのない緑ちゃんを返してくれた「ひまわり」への、精いっぱい感謝をにじませた。(佐々木達也)

子どもが学べる場に

さだまさしさんも支える。大崎さんはいの一番に入会

(佐々木達也)

大島は震災後しばらくの間、孤立した。ほとんどの連絡船が流されたからだ。菅原船長はひまわりを沖に出し、流失を免れていた。2日後から約8カ月間、無償で本土との間を往復した。その奮闘ぶりは子ども向けの本になったほどだ。

この間、菅原船長は6人の遺体を見つけた。その度にこころを打たれてきた。「助かってよかった。早く

家さ帰っていいよ」。来春、本土と大島を結ぶ橋が架かる予定だ。菅原船長は陸路でつながるのを機に廃業を決めた。その一方で子どもたちが震災を学ぶ材料になればとひまわりの保存・展示を考えついた。

その思いに島民らが応え、20人ほどの「保存する会」が生まれた。被災地支援を続ける諏訪中央病院の鎌田實・名誉院長や歌手の

震災5カ月後の2011年8月、ひまわりは大島から本土へ向かっていた。レターに何か映ってはいなかった。角張って見える流木

とは違う。通り過ぎる一瞬、菅原進船長(75)は海中に何か漂っているのを目に留めた。

「あれっ、人じゃなかったか」。すぐに反転させた。仰向けの遺体が海面に浮かび上がっていた。小さい。子どもか。赤い靴が目

「緑ちゃんじゃないか」大崎さんの孫の緑ちゃん(当時6)の名前が脳裏に浮かんできた。

大崎さん夫妻は緑ちゃん